

「日本3.0」

Vol.5

日本の「イエ」は「ムラ」に勝てるのか

text by Norihiko Sasaki

文 佐々木 紀彦

主導の組織を起源とします。

そのイエが大規模化したものが大名連合体となったものが幕府です。

イエには、ヒエラルキーが厳然と存在しますが、外に開かれており、血縁関係を越え、養子という形で外部の血を取り入れていきます。また、自立性が高く、農耕から軍事まで複数の機能をイエの中で担います。

このイエ文化の最後の系譜が、日本型経営です。年功序列という点でヒエラルキーが強く、企業が福祉まで担うという点で機能が強い。そして、新卒一括採用で集団養子を行います。

一方の「ムラ文化」の特徴は、同質的で内向きで平等主義であることです。ムラでは、反対意見はありえず、全会一致となるまで延々と話し合いが続きます。

1970年当時、村上泰亮は「現在の日本社会は、ムラ社会的な大海のなかにイエ的な組織（企業・官庁など）が浮かんでいる姿と思えばよいだろう」と喝破しています。

その指摘は今もって正しいどころか、当時にもまして、ムラ文化が強くなっ

ているように感じます。

その一因となったのが、イエとしての会社の衰退です。今の会社は、もはやサムライの集団には程遠い。出世を目指さない、横並びの発言、内向きに閉じるなど、軟弱な公家集団になっています。

過去15年、経済記者として企業取材してきましたが、年々、日本企業の経営者や社員が小粒化しているように思えてなりません。取材していても面白くないのです。

「失われた20年」とは、イエがムラに侵食された、最後の砦だった企業までもがムラの論理に侵された20年間だったように思います。

国にはそれぞれの文化があり、他国の組織文化を猿マネしても、二流の模造品にしかなりません。

今こそ日本は、DNAにあるイエ文化を見つめ直し、現代用にバージョンアップした上で、ムラ社会を破壊していくべきときではないでしょうか。

これから日本をどんな社会にしているか。それを考える際のヒントになるのが「イエ」と「ムラ」です。

日本文化論はたくさんありますが、私は「イエ」と「ムラ」で読み解くのがもっとも効果的だと思っています。

もともと、「イエ文化」という概念を提案したのは、1970年代を中心に活躍した村上泰亮、佐藤誠三郎、公文俊平という3人の学者です。

詳細は彼らの著書『文明としてのイエ社会』に譲りますが、イエ文化とは、11世紀頃に東日本に出現したサムライ



Profile

NewsPicks 編集長

1979年福岡県生まれ。慶應義塾大学総合政策学部卒業、スタンフォード大学大学院で修士号取得(国際政治経済専攻)。東洋経済新報社で自動車、IT業界などを担当。2012年、「東洋経済オンライン」編集長に就任。リニューアルから4カ月で同サイトをビジネス誌系サイトNo.1に導く。2014年7月から経済ニュースサイト「NewsPicks」の編集長を務める。著書に「米国製エリートは本当にすごいのか?」「5年後、メディアは稼げるか」がある。